

# 転生したら男の娘でした

-男の娘がサキュバスのペットになる世界-



「あれ？ここは……？ていうか、声を変だな？  
やけに高いというか、女の子みたいな声？」

気がつくと俺はどこか中世の神殿の様な場所に居た。  
どうにか、ここに自分がいる経緯を思い出そうにも  
イマイチ記憶が霞がかって思い出せない。

「まさか拉致……？いや、それなら俺みたいな  
野郎でなくて、可愛い女の子が金持ちだよな」

自分で言うのも何だが見た目も凡庸。  
貧乏って程でもないが金持ちとはいえない経済状況。  
正直リスクを負ってまで拉致する必要が皆無である。



うん、世の中の人間はほとんどそんなだ。  
だから悲しくなんか無いぞ。ほんとだよ？

そんな事を考えていると見知らぬ女……  
いや、痴女がニコニコ笑顔で向かってきた。

「ペット！？ていうか、下着！？  
召喚っていったい何を言って……！？」

『うふふ、召喚は成功のようですわ。  
シェア度は普通みたいですが見た目も私好みですし  
まあ十分許容範囲ってところかしら？  
よろしくお願いしますね。私のペットさん』



『ああ、自己紹介が遅れましたね。  
私の名前はサリア。サキュバスロードです』

そうサリアと名乗った女は黒い翼の様な翼を広げる。  
冗談のような光景だったが、男としての本能が  
この女に捕まるのはやばいと警鐘を鳴らす。  
だというのに……

『ああ、逃げようとしても無駄ですわよ？  
たかだかレアクラスの男の娘が私の魅力に  
抗うなんてできやしませんもの。  
この場に召喚された時からあなたの命運は  
私のペットとして一生生きることになったのですわ』

「う、動けない！？なんで……！？  
それに召喚とかペットとかサキュバスって……  
一体何を言ってるんだよ！？  
そもそもペットとか言うならもっとイケメンとか  
可愛い子を捕まえた方が……！」





『……？ああ、そうでしたわね。  
男の方はこちらの世界に渡る際、新しい体を  
手に入れるんでしたわよね。  
ほら、鏡をどうぞ？』

『昔のあなたがどんなだったかは知りませんが、  
今のあなたはサキュバス……すくなくとも  
私にとっては大好物の容姿ですのよ？』



そうにんまりした笑顔で、魔法かなにかの力で  
目の前に鏡を出現させる。

その鏡の中に写っていた自分は、かつての自分とは  
似ても似つかない、華奢で小柄な女の子のような  
体つきと顔をした姿になっていた。

「な、なななな！？なんだよこれ……？」

『そうですね、かいつまんでいうと……

この世界はサキュバスに支配された世界ですよ。  
この世界で男は全ての力を奪われ、  
一生をそのスライムにすら勝てない脆弱な  
少女の様な肉体のまま愛玩動物としてすごすのですわ』

『ま、最近のトレンドは異世界から素質のある物を召喚して  
その時に授かるはずのチート能力を  
エッチな方向に書き換えてペットにするというものです。  
ちなみに貴方の能力は『無限射精』だけ。レア度は下から  
2つめくらいですわね』

『まあとにかく、あなたはもう私に飼ってもらわしか生きる道が  
ないのですわ』

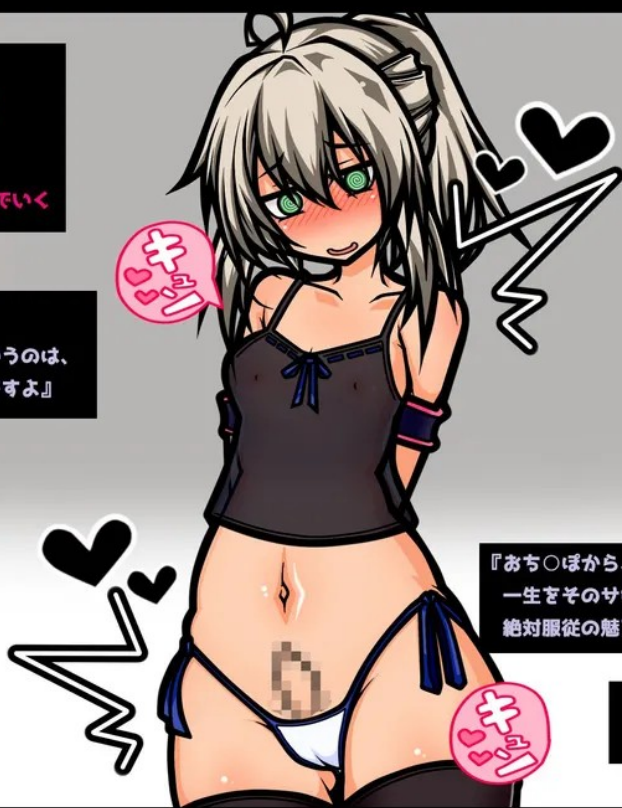
「飼うって……」

『うふふふ。そのままの意味ですよ？  
私達サキュバスにとって一番のエネルギーは  
殿方の精子だったり、射精する時に生み出される  
快楽エネルギーなのですのよ』

『ですので、貴方はこれから  
いっっぱいいっぱい気持ちよくなるだけで  
いいのですわよー？なんにもかんがえず、  
おち○ぼだけ気持ちよくなってくたされば  
他には何もいらないんですわ』

本能が警鐘を鳴らす。  
この女の声をきくだけで、自分の中の理性が  
溶けていくような恐怖を感じる。  
だというのに体はひどく興奮して、まるで  
その支配を歓迎するかのように期待が膨らんでいく

『ほらほら？体は正直ですわよ？  
サキュバスに精を搾り取られるというのは、  
隷属の契約を結ぶということなのですよ』



『おち○ほから、ミルクをびゅっびゅしたら最後  
一生をそのサキュバスの家畜として過ごせるよう  
絶対服従の魅了状態になっちゃいますの』

『だ～か～ら～  
射精して人間さんやめちゃいましょうね～？』



「ひっ、や……やだ……。そんなにやの……。  
そんなにやのほああ、あひっ、ま、まって……」

心でどれだけ拒もうと、この女に見つめられるだけで  
体のほてりが際限なく引き上げられていく。  
気付けばへこへこと惨めな腰振りで射精をおねだりする  
惨めな腰振りをさしてしまっていた

きゅん

きゅん

きゅん

きゅん

きゅん

『ほらほら？体は正直ですよ～？  
それとも～～あらあら、そうだったんですわね。  
隷属の契約をするまえから、射精の許可を私に  
直接もらいたかったんですわね～～？  
うふふふ、仕方ない子ですわね』

「ま、まって！？  
や、やだ……そんな今命令されたら……  
簡単に……！！」

『ほら、みてて上げますから、  
無様におち○ぽミルクぴゅっぴゅしちやいなさい』



「お、おほおおおお！！いっく！！  
簡単に命令されただけ簡単におち○ほイッちゃう  
あひいいiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii」

こうして俺の人生は終わりを告げ、  
サキュバスのベットである男の娘としての生活がはじまった。



『さて、じゃあ行きましょうか』

「へ？いくって何処に？」

『決まってるじゃない？お外だよ』

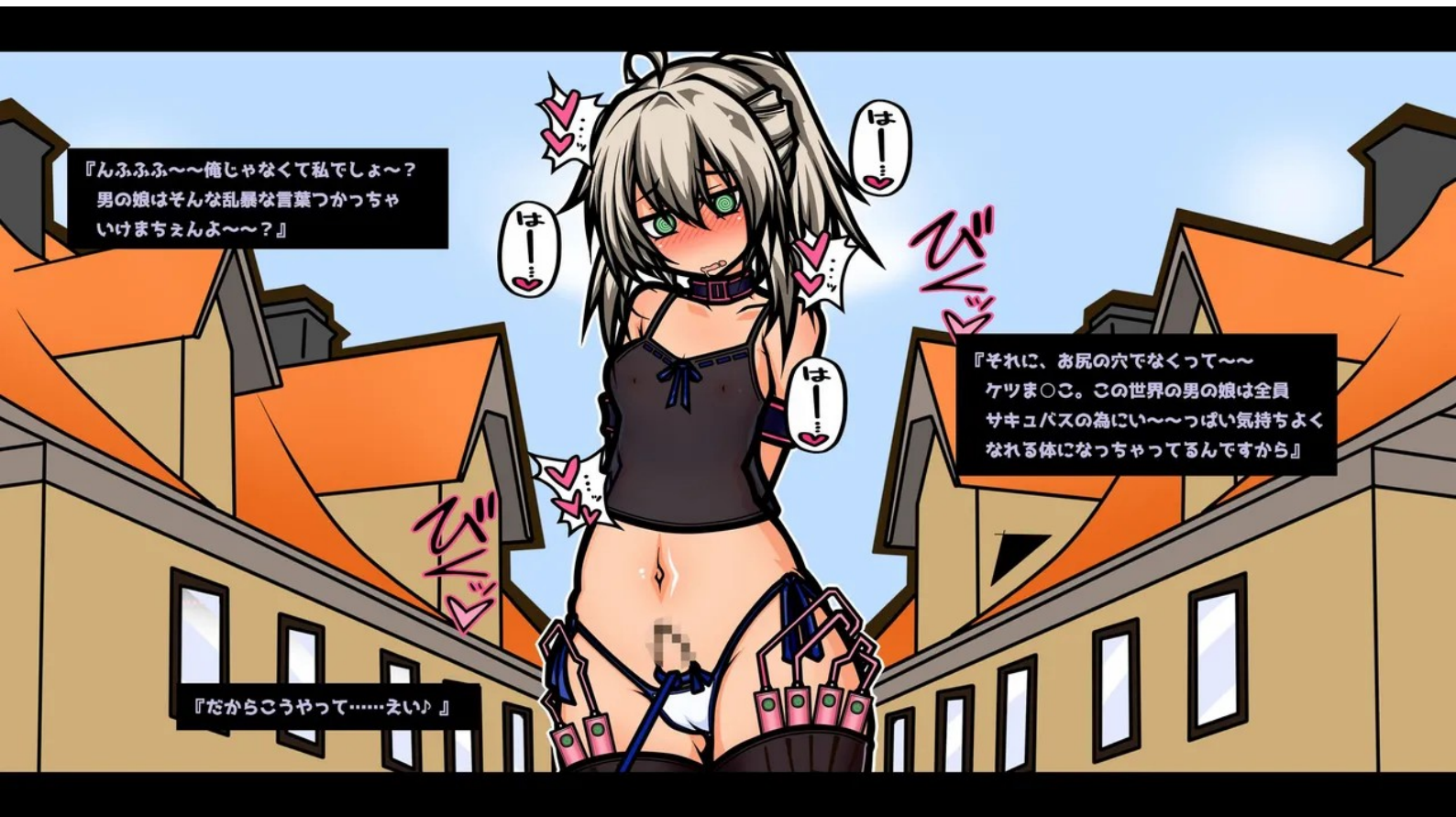
『ほらほら、早く歩かないと皆に  
けつマ○コにいっぱいローター詰められて  
おち○ほにリードつけられて散歩して  
アへってるところ見られちゃいますよ～？  
それとも、見られたいんですかぁ？ふふふ』

「そ、そんなこと言っただって……あ、おひ！？  
ほむいい。おしりの穴の中でフルフルして  
んおおおお……」

「や、やだああ。俺のお尻の穴どうなって……  
おほおおおお！？」







『んふふふ～俺じゃなくて私でしょ～？  
男の娘はそんな乱暴な言葉つかっちゃ  
いけまぢえんよ～？』

はー！

はー！

はー！

びんぎ

『それに、お尻の穴でなくって～  
ケツま〇こ。この世界の男の娘は全員  
サキュバスの為にい～っぱい気持ちよく  
なれる体になっちゃってるんですから』

びんぎ

『だからこうやって……えい♪』



「あひいいい！！おほおおお！？  
や、やあああああ、ち○ぽ引っ張られただけで  
気持ち良くなって！？んひいい」

「や、やめ……！おひいいい！？  
やだいっちゃう……！こんな街の中で  
ち○ぽ引っ張られただけでイケのやあああ」

『んふふ、だったら～ちゃぁんと歩きましょうね～  
ケツま○こにローターぎぢぎぢに詰められて  
おち○ぽリードで引っ張られながら自分が  
惨めなペットになっちゃったこと知りましょうか』

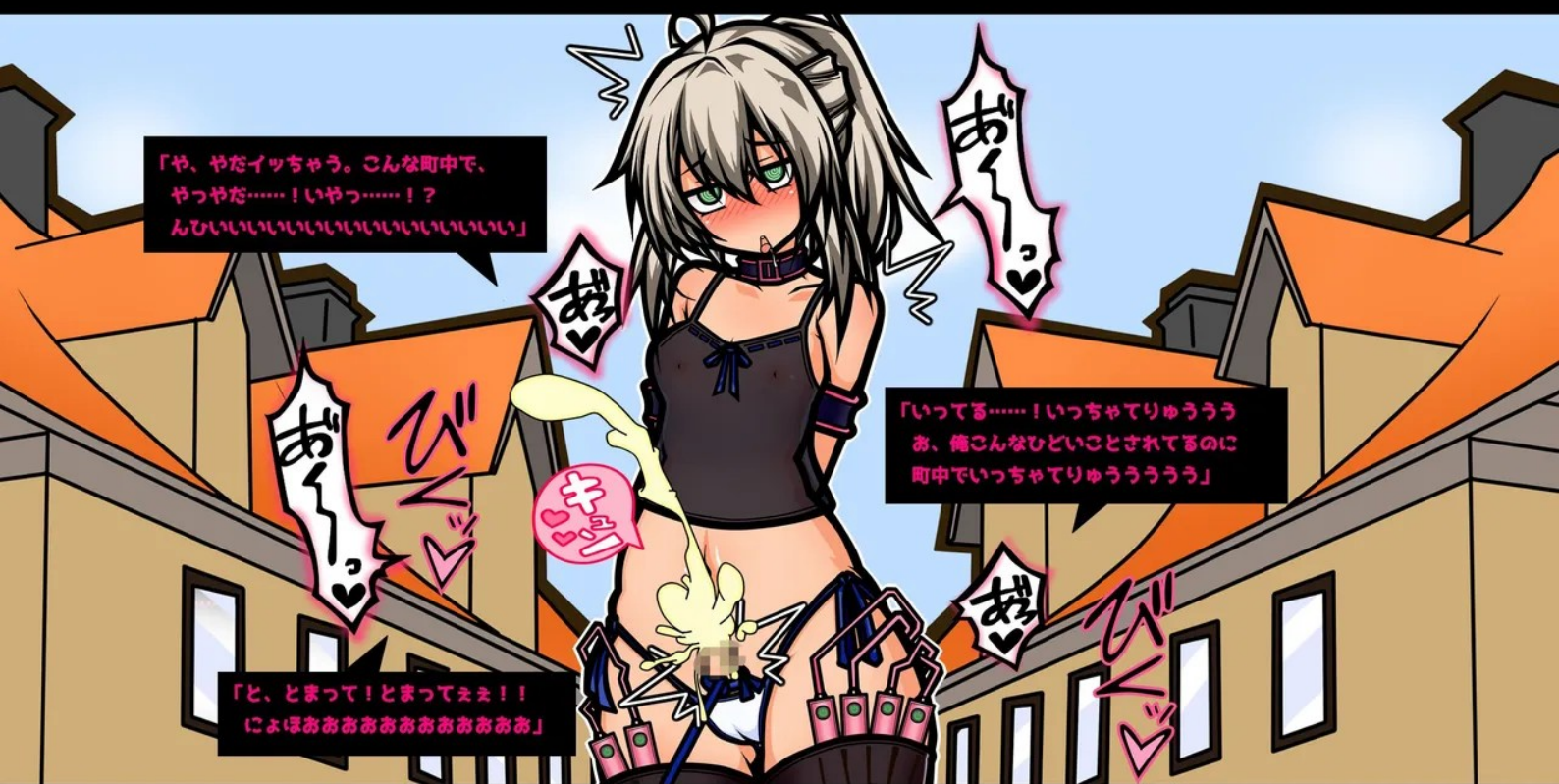
『ほらほら、いちにーいちにー。  
おち○ぽふりふりあるきましょー——わっ』  
びいん

「あひっ!!!」

そう言うと不意にち○ぽを引っ張るリードが張り詰める。  
その衝撃に羞恥心やお尻の穴からくる快楽で  
トロケきっていたち○ぽは抵抗などできなかった







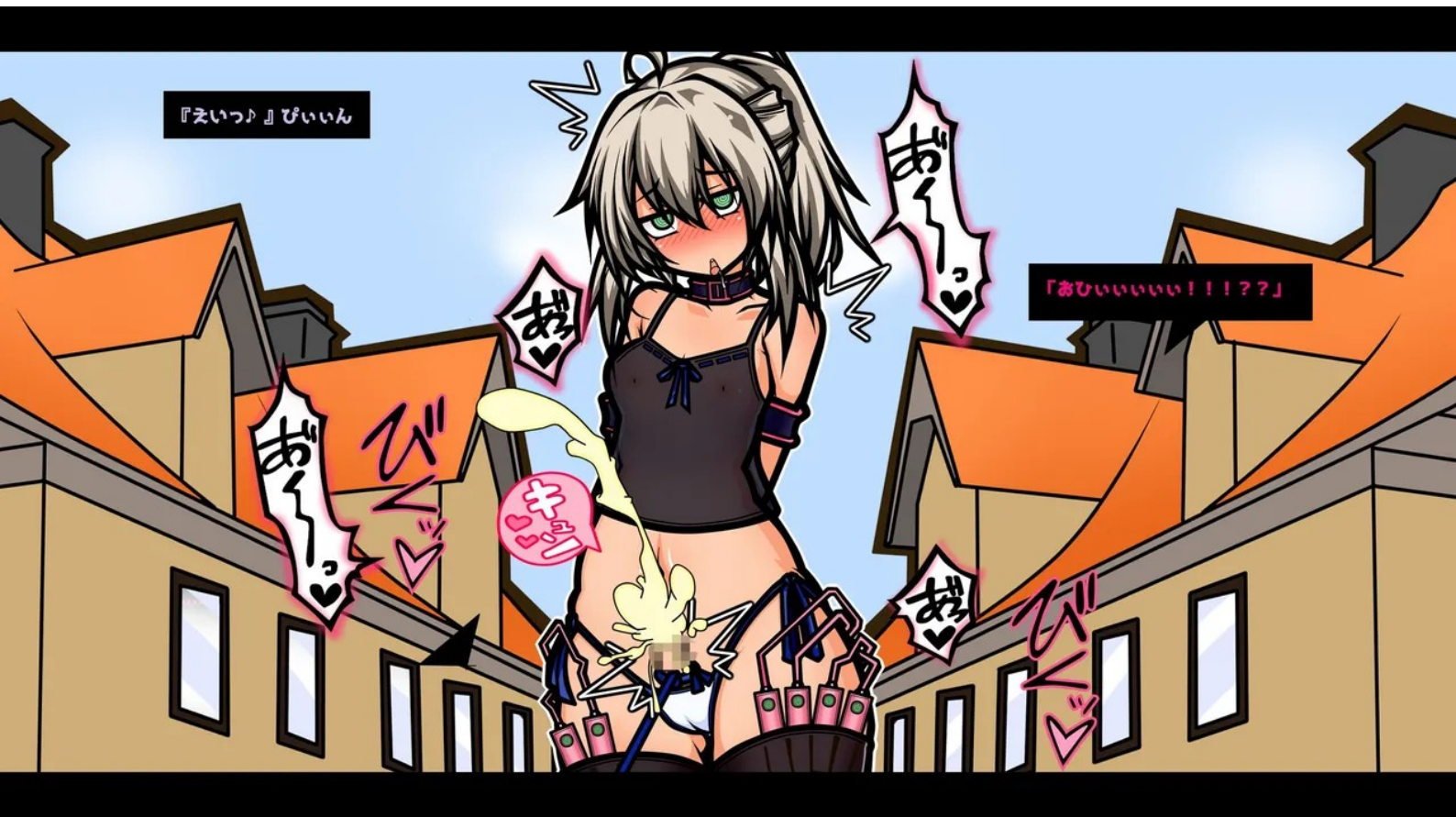


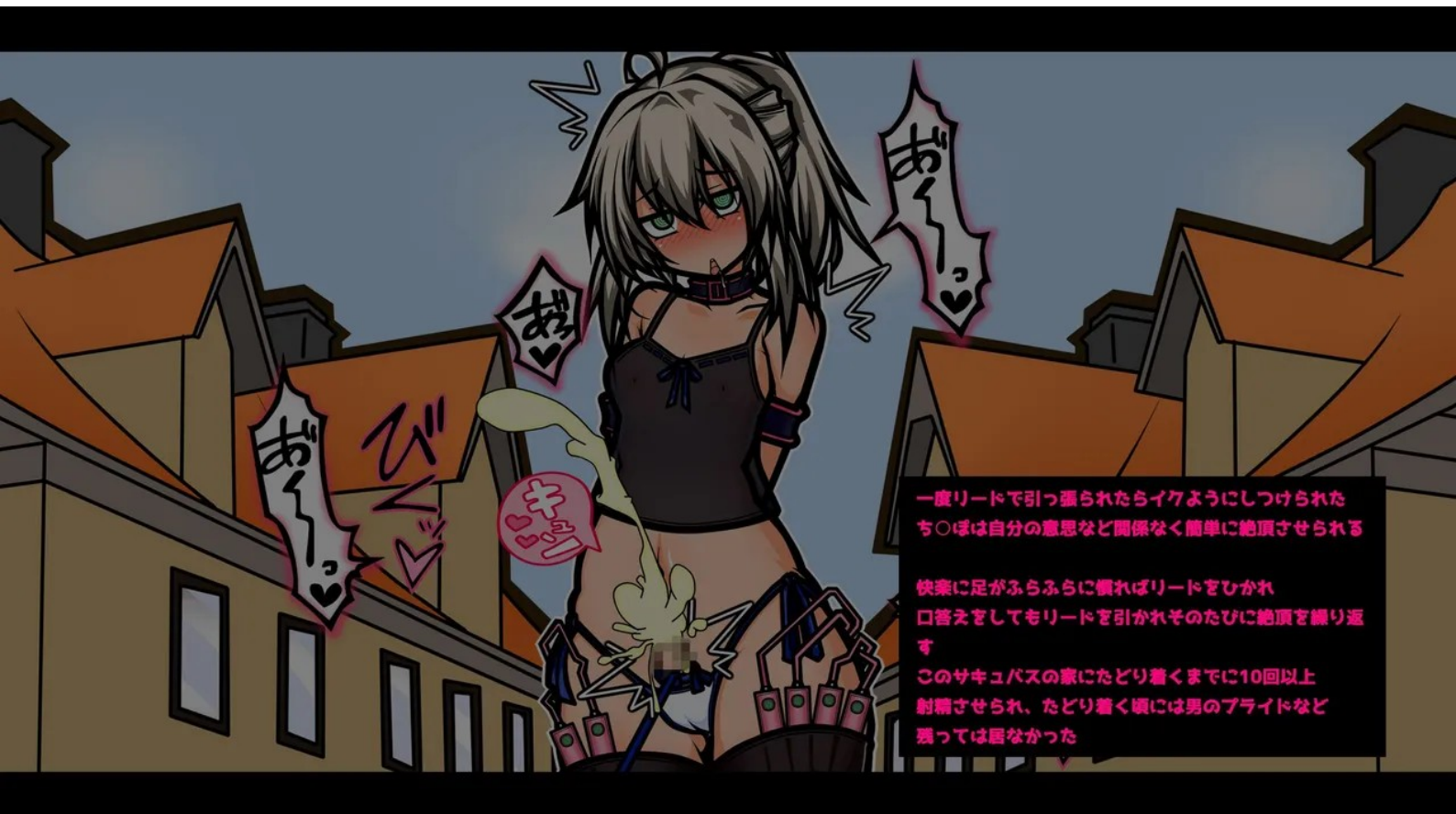


『あらあら～？我慢したのにイツちゃったんですかあ？  
だめな子でちゅねえ？でもいいですよおお？  
この世界の男の娘はそういう、おち○ぼすら  
自分で管理できない飼ってもらうためだけに生きてる  
惨めな愛玩動物なんですからあ』

『だから、い～～つばいおち○ぼ気もよくなっちゃって  
くれていいですよおお？何もかも忘れて  
惨めなペットさんになっちゃいましょうね？』

「そ、そんな……そんなの……  
俺は……人間で……こんなの……こんな」





一度リードで引っ張られたらイクようにしつけられた  
ち○ぽは自分の意思など関係なく簡単に絶頂させられる

快楽に足がふらふらに慣ればリードをひかれ  
口答えをしてもリードを引かれそのたびに絶頂を繰り返す

このサキュバスの家にたどり着くまでに10回以上  
射精させられ、たどり着く頃には男のプライドなど  
残っては居なかった



あの日、あのサキュバスの家に連れて行かれてから  
俺の生活は一変した。

「きよ、今日は何をするんだよ……？」

きゅん  
きゅん  
きゅん

はー…♡

はー…♡

はー…♡

きゅん  
きゅん  
きゅん

きゅん  
きゅん  
きゅん

きゅん  
♡  
♡  
♡

はー…♡

きゅん  
♡  
♡  
♡

毎日、変態チックな衣装を着せられては、  
ち○ぽや尻の穴を徹底的に弄られ、絶頂させられる。  
流石、淫魔というだけはある、そのテクニックには  
この敏感な体では太刀打ちできない。

結果、俺は毎日のようにこいつの前で醜態を晒していた



『ふふふ～大丈夫ですよ？怯えてるのに、  
精一杯強気に振る舞わなくっても～～？』

『本当は自分がどんなひどい目にあって  
アヘアヘイキ狂わせるか怯えながら期待してるのに  
元の世界での男として生きた記憶が  
邪魔しちゃうんですよね～～？』

きゅん  
きゅん  
きゅん

はー…♡

はー…♡

きゅん  
きゅん  
きゅん

きゅん  
きゅん  
きゅん

きゅん  
♡  
♡  
♡

はー…♡

はー…♡

きゅん  
♡  
♡  
♡

『そういうところも意地らしくて可愛いんですが  
そろそろ慣れて貰おうかなと思ったわけですよ』

『と、いうわけで～～』

『じゃ〜ん♪ これが見えますか?』

『これはですね〜? しつけのなっていない男の娘向けの  
調教用アナルスティックってものなんですよ〜?』



『いろいろな形をしてるこのスティックで男の娘の  
ケツま〇こをグチュグチュ〜って弄ってあげると  
あっというまに、ケツま〇こをトロットロにトロケさせて  
よがり狂っちゃうスグレモノなんですよ〜?』



「ま、まって……まさかソレで……」

『はい、もちろんそうですよ～？  
キミのケツま〇こはこれから、コレをつかって  
くっちゃくちゃのトロットロになるまで  
ほじくりかえされちゃいま～す』

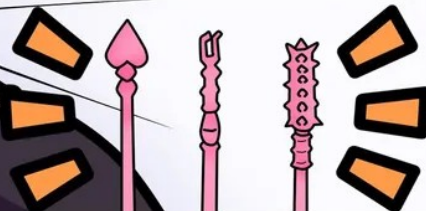
きゅん  
きゅん  
きゅん

「や、やあああ～」

身をよじって逃げようとするも男の顔のちからでは  
軽く足を体重をかけて抑えつけられただけで  
動くことができなくなってしまう。  
俺はただ自分のお尻のアナをこのサキュバスの前に  
無防備に晒すしかなかった。

きゅん

きゅん





『だめですよあ？今日はキミが自分から  
私の淫乱ケツま〇こをグチュグチュしてください～  
ってあねだり出来るようになるまで許して上げませんから』

『いろいろ種類がありますから～～ぜーんぶ試して  
どれが一番気持ちよかったか教えてくださいねえ？』

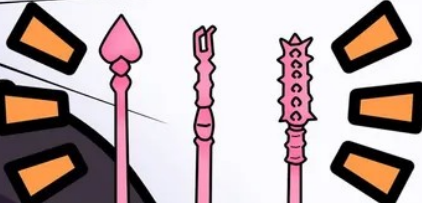
あねだり  
あねだり  
あねだり  
あねだり  
あねだり

「そ、そんなあねだりなんか言えるわけ……  
や、たしゆけ……たしゆけてえええええ」

あねだり  
あねだり  
あねだり  
あねだり  
あねだり

キミ  
キミ  
キミ  
キミ  
キミ

キミ  
キミ  
キミ  
キミ  
キミ



『はいまずはハート型スティックですよ〜〜?』じゅぽ

「おひいいい!!?お尻の穴……はいつて……?  
んひいいい、な、なんで……これ入れられると……  
おほああ。お尻の穴きゅんきゅんして……」

『これはですねえ、サキュバスの体液……つまり媚薬を  
結晶化させたものがこのハート部分にわりこまれて居る  
らしいですよ〜?どんな強情なケツま〇こも  
コレを入れられただけで、くたくたの無防備アナルに大変身』

『それをこうやって全体にまんべんなく  
じゅっぽじゅっぽしてあげると〜  
はいパツクリ口を開けっ放しのアナルが完成しちゃいまーす』

『そこに〜〜〜えい』じゅぽぽ

「ひえ……？おびよおおお！！？」

『メロメロになっちゃったトロトロおなるに凶悪なケツ肉を一粒一粒  
ひっかいて虐めるような極悪スティックを投入しちゃいまーす  
すごいでしょ？男の娘がどうやったって気持ち良くなっちゃうように  
計算されて作られたスティックが』

『娼業で油断しちゃったアナルに  
二本も一気にぶちこまれちゃってますよ〜?』



『キミはこれでこれから一日中  
ケツま〇こをほしく返されちゃうんですよ  
どんだけ泣いたって、おしりの穴が落ちて  
敗北宣言しても許してもらえないし  
男の娘の非力な力じゃ逃げることだってできない』

『た〜っぶり時間もありませんから  
男の娘がどういう存在か理解してってくださいね』

「ま、まって、やつらあああ！！  
ペットでいいでしゅから、そんなひどいこと  
やつ！！クチュクチュしないで！？  
おほっ！おほおおおおおおお」



7 時間後

「あひっ.....はひいひい.....  
もうくちゅくちゅしにやいでええ.....  
落ちてりゅうう、私のケツま○ご完全屈服してりゅかりや  
ケツま○ごやしゅませてえええ」

落ちてりゅうう、私のケツま〇こ完全屈服してりゅかりゃ

ケツま〇こやしゆませてえええ」

\_\_\_\_\_

もうどくろくちゅくちゅされても気持ちいいによおお  
おち○ぼもケツま○こもイキすぎて訳わからなくなってるかりゃ」

おち○ぽもケツま○こもイキすぎて訳わからなくなってるかりゃ」

おち○ぽもケツま○こもイキすぎて訳わからなくなってるかりゃ」

「はむいいい。私がまちがってましたああ  
男の娘はサキュバス様の慈悲で快楽を与えてもらうだけの  
エッチなペットでしゅうう」



「けちゅま〇こもおち〇ぼも全部さすげましゅかりゃあああ  
けちゅま〇こもうゆるし、あむいいいいい」



「はむいいい。私がまちがってましたああ  
男の娘はサキュバス様の慈悲で快楽を与えてもらうだけの  
エッチなペットでしゅううう」



あー  
あー  
あー

あー  
あー  
あー

あー  
あー  
あー

あー  
あー  
あー

あー  
あー  
あー

あー  
あー  
あー

あー  
あー  
あー

あー  
あー  
あー

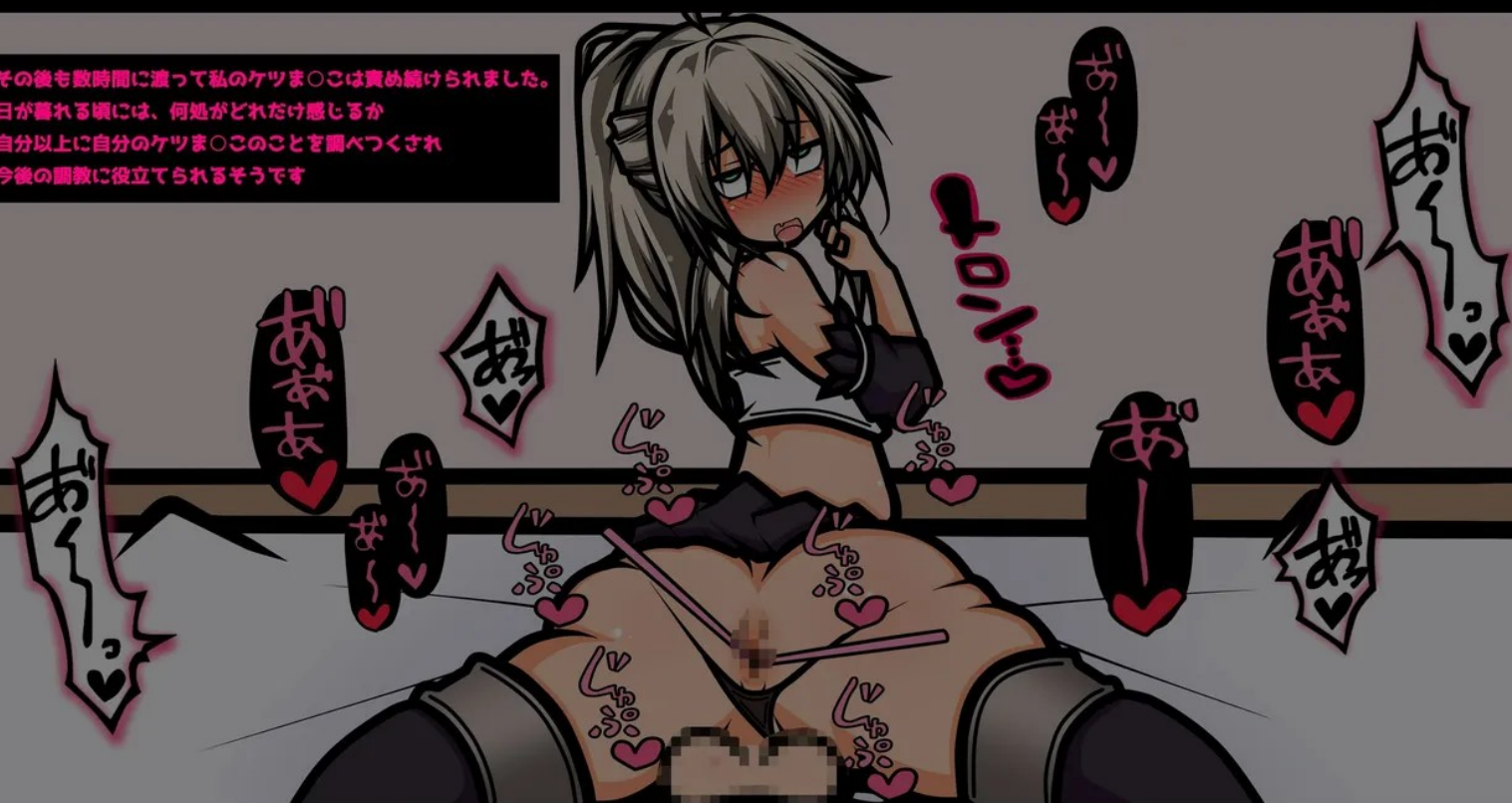
あー  
あー  
あー

あー  
あー  
あー

あー  
あー  
あー

「けちゅま〇こもおち〇ぽも全部さすげましゅかりゃあああ  
けちゅま〇こもうゆるし、あひいいいいい」

その後も数時間に渡って私のケツま〇こは賣め続けられました。  
日が暮れる頃には、何処がどれだけ感じるか  
自分以上に自分のケツま〇このことを調べつくされ  
今後の調教に役立てられるそうです





「はぁぁぁ……はぁぁぁ…」

今日はサリアが私を置いて出かける日だ。  
そんな日は賣められることもなく悠々自適の  
休日となる……わけではない。





「ふふっ!!?ふふうううう!!」  
(ま、またきた!?おむいいい、やめ……  
これ以上、私のケツま○こかき回さないでよぉ  
ごんにやのすぐ、おほぁぁぁ)

はー…♡

はー…♡

はー…♡

はー…♡

あのサキュバスが外出してる間、  
私のケツま○こには、極太のパイプが押し込まれ  
体を完全に拘束され放置されることになる  
  
敏感すぎる体は、回転やピストンで的確に  
私の弱点を攻め立てるパイプに叶う筈もないのだけど

「ふふううう！！おふっ！おふふううう」  
(ほひっ、イク！こんなのすぐイクちゃうのにいい  
まって！止まらないでええええ、  
お尻の穴生贍しにされて、やだ！やだふおお！  
いかせてええええええええ！！)

はー…♡

はー…♡

はー…♡

はー…♡

ウウウウウウ

せっきくの精液や絶頂エネルギーを主が居ない間に  
発散させてしまうなんてもってのほかである。

パイプには当然のように絶頂前で動きを停止する  
機能を取り付けられ、あと1秒でも振動してくれば  
絶頂出来るというところでいつも止められてしまう



「おううう!!ふひっ、ふひい」

(イキたいよああ、イキたいのに……  
いかせてくれないなんて、つらすぎるよああ)

(射精……！射精……！射精させてええええ！  
なんでもしゅるかりゃああ！！射精させてえええ！)



もうそこに男だった頃の尊厳は何も残っていない。  
いつ帰ってくとも知らない主に、絶頂を切望し  
無様に腰をかくかく振って少しでも快楽を得ようとする  
浅ましいペットの姿しかなかった。

(そんなの最低なのに……  
こんな無様な存在になるなんて嫌なのにいい  
なんでこんなに気持ちいいんだよぉ!!)

射精したい。でもそんな状態で我慢し続けた自分を  
サリア様に褒めてもらいたい。それでいっぱい  
主の為に射精したい。  
ペットとしての自覚が自分の中に確立されていくのを  
恐怖しながらも喜んでしまう自分がいる。

そんな心境の変化を感じたのかパイアは今までにない  
攻め方に移行した。

「んふ！？ふうううう……あふううう」  
(な、なにこれ……？今までみたいな急に動き出して  
絶頂付近まで一気に押し上げられて放置されるんじゃなく  
ずっと、めるめる振動してる？)

ウウウウウウ

ウウウウウウ

今までの動きとは違うゆるい震に困惑しつつ  
この程度なら耐えられるという感想を抱く。  
だが淫魔の玩具がそんな甘いはずもなかった





甘い振動は決して絶頂に至れないゆるい責であり  
今までのような断続的な責でなく常に甘い快楽を  
ケツま〇こに与えつづけてくる。

2時間ものあいだ、その甘い刺激にさらされた  
けつま〇こはトロトロに熟れきっており、  
頭の方もまともな思考ができないほどトロけさせられていた

ウウウウウウ

ウウウウウウ

「んほっ！んほおおおおお」

(おしりきもちいいい……おち○ぽイケにゃいのには  
お尻の穴だけでこんなに気持ちいいなんてへえええ)

(たしゅけ……もう、もどれなくなっちゃう……  
これ以上お尻の穴の気持ちよさしったりゃああ  
でも、でもああ！おほおおおおおおお)

その脳を溶かすような快楽に恐怖しながらも  
快楽に流されていく。それがたまたま背徳的で  
その事実が快楽を限りなく加速させていく





『ただいま戻りましたよ～？  
ちゃんといい子にお留守番できてました？』

『って。あらあら？射精したさに  
すごいことになっちゃってる見たいですねえ？』

甘いパイアの振動で熱れきってぐちゃぐちゃになった  
尻穴と涙やよだれでベタベタの顔を見て面白そうに  
サリアは笑う。

「おはっ……！お願いします！  
射精させてくだひゃいいい……！  
もうケツま○ごもあち○ぼも限界で……  
射精っ……射精いいいいい」

い  
ゃ  
う  
。♡

ん  
ん  
ん  
ん  
ん

『うふふ、さんざん焦らしてあげた効果は  
ばっちしみたいですわね？でも、このまま  
素直に射精させてあげても芸がありませんし……  
そうだ……！』

「へ？おほおおおおお！？」



『ふふふ、どうですか〜？サキュバスの  
肉厚ぷりぷりおっぱいのパイズリですよ？  
ちょうど外出して汗ばんでいますから、  
天然媚薬ローションでにゅるにゅるで気持ちいいでしょう？』

『まだ挟んだばかりなのに、もうイキそうになっちゃって  
そんなことじゃ、おちんぼの本来の使い方なんて  
到底出来なさそうでちゅねえ？』



「そんな……！そんなことは……おひいいい」

『あらあら？口答えでちゅかあ？いけませんねえ  
でも、そこまで言うんでしたら一つ賭けをしてみましょう  
もし私の胸の中でおち○ぽを射精せず3分間耐えられたら  
私のサキュバスおま○こに挿れさせてあげましょう』

い  
ちゅ  
ぽ  
♡

『してます？サキュバスのおま○こは  
男の娘のおちんぽを気持ち良くするための快楽機関で  
と〜〜つても気持ちいいんですよお？』



「おま○こ……。せつくす……」

私の中に微かに強った男としての尊厳が  
その言葉に刺激される。

い  
ぢや  
う。  
♡

『そのかわり……もし、たった3分も射精が我慢できなかつたら  
そんな役立たずのおち○ほは二度とおま○こに挿れる事が  
できなくなっちゃう呪いをかけちゃいましょうね?』

「そんな……まって！？おひょおおおおお」

『はい、スタート～。キミのグソザコおち○ぼちゃん  
私のおっぱいの中でびっくんびっくん跳ね回ってますよ。  
でも、そんなことしても、短小おち○ぼじゃ逃げ場なんて  
無いんですけどね～～？』

『ほらほら、がんばれがんばれ～～』

こんなことじゃ永遠に童貞さん待ったなしですよ？  
いいんですか？セックスの権利を剥奪された男の娘は  
私達のペット（男の娘）を持ち寄った集まりでも、  
遊びでケツま○こに挿付されるメス犬扱い  
待ったなしなんですからね？』



「や、やだ……！そんなの……！そんなの……」

『うふふ、あらあら……想像して興奮しちゃったんでちゅか？  
逆効果だったみたいでちゅねえ？ そんなにMな男の娘なら  
もうセックスなんて出来なくても問題ありませんね』

『ほらほら、もうイッちゃっていいですよお？  
男として完全に終わる事を引き換えにした最高に気持ちいい  
絶頂きめっちゃいましょうねえ？ それぞれそれ～』



「やあ！！いやあああ！まって……！たしゆけ！  
終わる……！おわっちゃうううう！！私、わたしいい！」



「んほおおおお！！いつてりゅううう！！  
おち○ぽミルクどびゅどびゅでりゅううううう！！  
おほっ！おほおおおお！！  
もう絶対セックスできなくなっちゃうのにいい  
んほおおおおおおおおおお！！！！」

『いっぱいでしたわね？でもまだ奥の方に残ってるみたいだし  
吸い出してあげますからねえ』じゅぶ

「おほ！？わ、私のおち○ぼたべ……！おひいいい！  
すわれ……すわれりゅうう！！？  
キン○マの中のち○ぼミルクすわれむえ！！？にょほおお」

「もうでにゃい！でにゃいかりゃああ！！？あひいいい！！  
おち○ぼお口のなかでとけりゅうう！！ほひ！  
ずっと射撃してるみたいであひっ！！たしゅけええええええ」





このあと私のおち○ぼはサリア様にキン○マが空っぽになるまで  
眠い出され、その長過ぎる射精が終わる頃には、  
かすかに残ってた男としての尊厳はもとより、男の娘としての  
プライドまでも眠い出され、完全に一匹のメスに変えられて  
していました



この世界に召喚されてからどれだけの日がたっただろうか。

『ほら、ちゃんと他の飼い主様にご挨拶しなさい?』



「わ、わたしは……サリア様のペットです。  
サリア様の言いつけを守れず、無許可に射撃してしまって  
永遠にセックスの権利まで奪われてしまった  
無様なメス犬です……よろしくおねがいします……」



今日は月に一度の男の娘をペットにしてる  
サキュバスの集会の日らしい。  
一週りの調教が済んだ私は新しいペットという事で  
皆に紹介されるというのだ。



【あらあら、サリアったら酷いわねえ、男の娘に  
一度も女の子の中の気持ちよさを教えて上げること無く  
セックス禁止の呪いをかけちゃうなんて】

【まあ、貴方は射精させるのが好きなようだし、  
私みたいに男の娘には似つかわしくない巨根に仕上げて  
おまんこで楽しむタイプでも無いんでしょうけど?】

はー!...

はー!...

はー!...

きゅん  
きゅん  
きゅん

きゅん

きゅん

きゅん

『あら〜? 私だってサキュバスですもの。おまんこで楽しむ  
趣味くらいは持ち合わせてますよ? でも、この子の場合  
そんなちょっとした男としてのプライドもゼーんぶなくて  
男の娘のカーストでも最低辺に落として可愛がって  
あげたかっただけですよあ?』

【貴方らしいわねえ。だったらうちの子、少し使ってみる?  
なかなか具合いいわよ?】

いいわね。そんな軽いノリで、サリア様と親しげに会話していた  
サキュバスの連れた男の娘を押し倒し、  
かつて自分が持っていたものよりも遥かに巨大なち○ぽを  
そのおま○こで飲み込んでいく。



『うふふ。物欲しそうな顔してもだめよお？  
貴方はもうおま○こにおち○ぽを挿れることなんて  
一生できないんですもの。それもあの時少しでも  
射精を耐えられていたら、違ったんでしょうけどね』



『待て、よ。貴方は私とこの子のセックスを、  
そのちっちゃいおち○ぽおっ動てて見ていなさい？』



「そ、そんな……こんなの……おひい」

周囲から漂ってくる甘い香りのおかげと同時に  
頭の中がチカチカと明滅する。

(にや、にやんで……！？この匂いを嗅いだと脳が……  
脳みそとろける……！？おほあああ)

『すごいでしょ？サキュバスがペットを持ち合っの  
パーティなもの。当然やることは決まってるわよねえ？』



周囲を見てみると、男の娘のち○ぽをフェラやおま○こで楽しむサキュバスの姿。男の娘同士にセックスをさせてそれをおかずに楽しんでいるサキュバス、ふたなりになって男の娘を犯しているサキュバス、中にはサキュバス同士で楽しんでいるものまでいる。

『サキュバスの体液は、とーっつても強い媚薬なのはしってるでしょ？  
それが、この部屋いっぱいに充満してるんですもの  
もう匂いだけでイケちゃいそうですわよねえ』

それが、この部屋いっぱいに充滿してるんですもの  
もう匂いだけでイケちゃいそうですわよねえ』

「あひっ？あへえ？？ら、らめ……  
こんな匂い強すぎて、頭が……ばーになりゅうう  
イキたい……！イキたいのに……からだがある」



『うふふ、あん。たしかにこの匂い、サキュバスの私でも  
きつく感じるほどですもの。このこったら、私の中で  
さっきからイキっぱなしですよおお？』

「しよんにゃ、ずるい……！わたしも……  
私もせっくしゅううう、せっくしゅしたいのにいいい」

『あらあら、本当に仕方がないペットですわね？  
そんなにセックスしたいならさせてあげたいのは  
やまやまですが……』



『もう二度とセックスできない呪いがかかっているんですもの  
キミは、そこおとなしく私達のおま○こハメハメを見て  
射精してくださいね？  
あふ、気持ちいい、良いわねえ今度、ちゃんとおち○ほの  
使える男の娘買ってこようかしら』



「そ、そんな……やだ！やだよああ。  
ちゃんとおち○ほ気持ちよくなってサリア様に尽くしますから  
捨てないで……！ちゃんとおち○ほいませうからあ」

ビクッ

お〜♡  
お〜♡

お〜♡  
お〜♡

お〜♡  
お〜♡

お〜♡  
お〜♡

お〜♡  
お〜♡

ビクッ

ぶっ  
ぶっ  
ぶっ

「いく！！ばち○ほくうう！！  
だからサリア様すてにやいで！！  
おほおおおおおおおおおお」



その後、サリア様は新しい子を買ってくるなんて臆だよと抱いて慰めてくれました。

蒸れたサキュバスの体臭で脳みそをトロケさせた私は  
その胸の中で10回以上も射精を繰り返し  
改めて永久に隷属すると誓うのです。めでたしめでたし……？